

総評と閉会の辞

和田：お疲れのところ申し訳ないのですが、一応プログラムには総評という項目がありまして、私と浜渦さんのほうから、お話をさせていただきますが、予定時間を過ぎていきますので、簡単に済ませたいと思います。

僕自身はケアの現象学という分野は全く無知でありまして、隣に座られている浜渦さんの方が日本では第一人者、スペシャリストでありまして、たぶんご存じだと思いますけども、最近、知泉書館というところから出版された『〈ケアの人間学〉入門』という本を編集執筆され、現象学という語は使われておりませんが、この中に今回お話に出たスピリチュアルケアとか、そういう問題も含めて詳しく書かれているので、もしお読みでない方がありましたら、ぜひ書店で手にとって読んで頂きたい。そういう関係で、私は、相撲でいえば露払いの役ということで、内容に関していちいち触れている時間がないので、簡単に二つだけ僕自身の最近経験した私的な出来事をお話しして、今日の内容に対する総括というふうにさせていただきますと思います。

ひとつは、たまにですが僕はテニスをやっていて、そのクラブの会長がこの春に、去年まで非常に元気だったんですけど、急に脳梗塞で倒れられてですね、最初は左脳が梗塞状態であって、しばらくして右脳のほうにも梗塞がおよんで、いわゆる植物状態になってしまいました。ただこの植物状態というのは、最近の科学によると、植物というのは人間の言葉に反応して生きている、いろんな意味で人間とコミュニケーションしているという説も有力になってきて、そういう言葉を使うのは良くないと思うのですが、いずれにしてもこういう状態の中で何度かお見舞いに行ったんです。そのとき一番僕自身感じたのは、医師はそこにはいないわけですから、たまに看護する看護師の方が来られるわけです。そのときに、病気でない人間にとって何が一番ありがたいかという、病室に来られる看護師の表情ですね。多分医師は印象として非常に暗いし、重々しいし冷たい、こういう人格の医師がたぶん多いと思うんですが、そういう中で唯一の救いが、看護師さんの介護ですね。そしてどういう状態であれ、病む人に対する態度をわれわれは見るわけですから、その時のちょっとしたことが非常に心に響くという。そこが一つ大きな問題があると思うんです。

もう一つは、この夏に義母が肺がんだということを宣告されて、さいわいIPという段階で、手術をして、その時に経験したことですけども、さきほどインフォームドコンセントということですが、つまり何をそこで経験したかということ、医師や看護師は圧倒的な知識を持っているわけですね。そういう知識を持ってインフォームドコンセントの名のもとに、いろいろ説明する。一番ショッキングだったのは、「この手術は全身麻酔をします。全身麻酔をした結果何%かの患者は、戻ってこられません」というようなこと、ネガティブな情報をいっぱい流される。これはもちろん病院としては何かあったときに訴えられては困る、そういうことの予防対策とするわけですね。とにかく患者が聞いたらそれだけで打ちのめされるような情報ですね、無理やり患者に提供してですね、そこに妻もいたわけですが、妻はそ

れを聞いてもう倒れてしまっ、そういうことがあったわけです。そういうありようを、どういうふうにと考えたらいいかということ、ずいぶん考えました。その手術の後、がんになった本人は「なぜ私が」とか、とくにがんの場合はそうですし、苦しみがあるんですけども、やっぱりその苦しみをずっと見通してですね、どういう軽い言葉でもいいんですけども、少しでも和らげる、そういう病院側の体制が整ってれば、患者の家族としては、どこか救われるんですけど、意外にそうではないところがずいぶん見られました。つまり全体的にそこで働いている人の表情が、忙しすぎて生き生きしていない、そういうことが響いたりしたわけです。そういうことを僕自身今回経験したものですから、今日のお話を含めてさらに個人的には考えていきたい、そういう意味ではいろいろ有効なお話をさせていただいて、どうもありがとうございました。

浜渦：だいぶ遅れていて、新幹線の時刻が迫っているという方もいらっしゃると思いますので、できるだけ短く簡潔に切り詰めてお話ししたいのですが、今日は一日朝からお付き合いいただきましてありがとうございました。大変興味深い話をいろいろ聞かせていただきまして、私も沢山勉強することができました。最初の榊原さんの話は、私たち哲学側からの話で、基調講演というところで最初の入り口を作ってくださいったものかと思います。そこからいろいろ議論を展開できるための、いろいろな足場を作ってくれたと思います。それから一宮さんは生体肝移植の話、生体肝移植の背後でどういうことが起こっているのかというのを、垣間見させていただきまして、大変学ぶところが多かったかと思ひます。それから河さんの、臨床ケアにおけるスピリチュアルケアの研究というのは、これまた、私自身非常に興味を持ってきたテーマでもあります。この研究の成果が出てくることを、大変期待しているところであります。それから最後の、淀川キリスト教病院のホスピスという歴史のある現場で、どういう体験をし、どういう疑問を抱いておられるのかというのを、お話しいただきまして、私も勉強することが多かったところであります。

私が今日、開会の言葉のところでも言ひましたけども、私たちが掲げている応用現象学というのは、決して我々が既に持っていてしまっている、出来上がった理論というのを、現場に適用しようなんて、そんな気はさらさらないということと言ひまして、むしろ現場の方々との対話ということのほうが大切で、それによってお互いに学びあうことができる。ですから、現場の方々にも、私たちが少しは何か提供できることがあるかもしれない。しかしむしろ、私たちがほうが現場の方々の声を聞いて、或る意味でわれわれの理論をもう一度練り上げる、そういう現実と直面する中でもう一度新たに、どこが私たちの理論の空回りしてしまっているところなのか、ということを見つめなおすいい機会だというふうに思っています。そういう意味での対話というのが、私たちの今回の企画だったのですが、今日はそのための取っ掛かりみたいなのがやっと始まったみたいのところだと理解しておひまして、これからますますこういうかたちで、こういう機会を持ってたらいいかなど思っています。

ちょっと手前味噌なことばかり言っ申し訳ないのですが、ここにこういう

ものを持ってきていますけども。先ほど私の本を紹介していただきましたけども、同じようなタイトル、さきほど紹介いただいたのは『〈ケアの人間学〉入門』だったんですけども、こちらは『ケアの人間学』ということで、5年ほど前から静岡で、地元の人たちを中心に研究会をやっておりまして、その1年間の成果をこのように要旨集として出して、今、今年の3月に4号が出たんですけども、これをちょっと持ってきております。後ろに置いてありますので、もし希望があったら持っていただけたら、あるいは欲しいのに無くなっちゃった、ということがありましたら、連絡いただければ提供することができます。ということで、これも実は看護だけではなくんですけども、福祉系の方々とか介護系の方々、あるいは教育関係の方々、そういう人たちとの対話のひとつの成果であります。

ということで、今日はそういう意味で決して、最後に田村さんが提供してくださった疑問に対しても、「じゃあ我々が答えを言いましょう」というような姿勢では、もともとおりませんので、「私たちとしても正解を持っているわけではない。でも一緒に考えていきましょう」というための今日はひとつのステップであったと思って、これからこういうかたちで一緒に何かする機会を広げていくことができれば、と考えております。ということで、今日で決して終わりというわけではなく、これからも続くということで、最後を締めさせていただきますと思います。以上です。

最後に閉会の言葉が榊原さんからありますので、私たちの総評はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

榊原：どうもありがとうございました。この会議は、私たちがしております科学研究費補助金の援助を受けた共同研究「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」ということで、現象学を応用して現実の問題に関して少しずつでも考えていこうという、そういう試みの一環なのですが、今回は、昨日、「システム論と現象学」それから「ケアの現象学」というタイトルで国際会議をいたしまして、本日は同じ「ケアの現象学」というタイトルで、ケアの現場の方をお招きして、一緒に考えてみたい、という試みになったわけです。私たちは哲学とりわけ現象学を専門にしている人間の集まりでして、ですから普段は大学の中で、頭の中だけでいろんなことを考えている人間なのですが、現場の方に来ていただいてお話をさせていただく、それによっていろいろ考えを深めていく、そういうことをしてみたい、その試みの一環だったわけです。

今日は一宮さん、河さん、それから田村さん、貴重なご発表、本当にどうもありがとうございました。改めて御礼を申し上げます。現象学にいっぱい課題をいただいたような気がするのですが、原理的に解けない問題なのかもしれない、と思うようなところもあります。というのは「人間が生きていく」ということにかかわる問題に、一義的な答えが出てくることは、もしかしたらないかも知れないからです。けれども、課題として引き受けながら、少しでもその場に居合わせ、時と場所を共有しつつ、一緒に考えていくことはとても大事なことだと思うんですね。ですので、これからもいろいろご批判やご意見をいただきながら、そして、「現場でこんなことが起こっている」「こんなことが課題になっている」ということをお話いただきながら、これを機会に、これに懲りずに、考え続けていくことができればと思っております。

ますので、これからもどうかご協力をよろしくお願いいたします。それから今日、この会議にご参加いただいた皆さんも本当にどうもありがとうございました。今後またいろいろ応援していただければ幸いです。本当に今日はどうもありがとうございました。